

## 第34回 龍頭が滝案内

### 瀧神社は、どこらへんにあったのか（その2：『雲陽誌』を手掛かりに）

前回に引き続き、雲陽誌を手掛かりに、瀧神社のお社（やしろ）の位置を、探索してみたいと思います。

現在では、龍頭が滝を訪れた人は、まず滝を眺めてから、左側にある、石の階段を上ります（図1の①）。石段を上りきると、広場に到着します。その広場から降りて行くと（図1の②）、滝の裏側に着き、そこには頭上に大きな岩石があり、滝の落ちる水を間近に見ることができます（図の③）。これが、現在の龍頭が滝の散策コース、といったところです。

雲陽誌は、龍頭が滝について、「瀧坂をのぼり華表の前より岩下にいたる この所を龍頭と称して瀧あり」と記しています（下記赤字の部分）。「華表」は、かひょう、と読み、鳥居（とりい）のことです。ここで、龍頭が滝の石の階段の坂は「瀧坂」と呼ばれていて、その「瀧坂」を登りきったところにある広場に、鳥居があったと仮定してみましょう（図1）。

そのうえで、現在の龍頭が滝の散策コースと、雲陽誌の記述とを重ね合わせてみると、「華表」を除けば、このふたつは、ぴったりと一致します。ということは、先ほどの仮説は、ほぼ正確で、石の階段を上りきったところにある広場には、鳥居（華表）があったことは、まず間違いないものと思われます。鳥居があれば、瀧神社のお社も、そのすぐ後ろにあったはずです。雲陽誌は、享保2（1717）年に成立したとされていますから、今から300年前には、鳥居と瀧神社のお社が、龍頭が滝に向かって、左上のほうに見えたことでしょう。

また、「岩下にいたる この所を龍頭と称して瀧あり」とも記されています。「龍頭」と呼ばれる場所（図1の③）を、滝壺に広がる河原から眺めると、大きな洞窟の入り口に見えます。「龍頭」と呼ばれていたのですから、この洞窟に「龍」が住んでいて、その洞窟の入り口（図の③）から、龍が頭を出す、と人々は考えたのではないかでしょうか。

大正8年に発行された、『名勝史蹟及天然記念物』という本によれば、島根県下の洞窟や岩窟には、「大神の琴」があったとか、「大国主命」「大蛇」「鬼」などが住んでいた、という伝承があるようです。昔の人々は、洞窟に対して、畏敬の念や、恐怖のイメージを抱いていたことが、このことからわかります。

現在は、龍頭が滝は、名勝地、観光地として紹介され、訪れた人は、その自然の美しさに感動します。しかし、300年前の人たちや、それよりももっと前の人たちにとっては、龍頭が滝は、「龍」といった超自然的なものを感じ、畏敬の念を抱き、手を合わせたくなるような場所だった、と考えられます。

（以下、次回に続く）

